

雨のにおい

新妻 良江

雨には 匂いがあるってことを
あなたは知っています？

伸び始めた新芽のあたたかな匂いだとか
老木に絡まる 蔦の匂いだとか
濡れた大地の匂いだとか
遠い世界の中の 微かな身じろぎだとか
いろんなものが混じってはいるけれど……。

それはたしかに

雨の匂いだと

今日 五月の山で感じた
確かに神様は願いを叶えて下さると
教会の帰りに いつものもので、ふと
信じてみようという気持ちになった時に……。

雨に匂いがあるならば
思い出にだって いのちがあると
信じられる気がしていた
そして いつの間にか
遠い 国で
新しい いのちとなって
生き始めるということ……。

人は何十年も

無駄なことをして生きていると思っていたが

そのうち ひとつも

本当は 無駄なことは無いということ

神様が教えて下さろうとしていると

微かに 感じていた

それは 雨の匂いのように

手に触れることが出来ない

遠い 真実では あるけれど

人が手に入れたいと願う

大切なものは 皆

形の無いものなのだから……。

でもそれはいつも 雨のように

形も色もなく

遠い空から降って来て

空しく消えて行くものだと思っていたが

神様のみ手の中に

真実はいつもかく匿されていて……。

でも ある日

その雨に 色と形があり

匂いがあるということに気付く

そんな日が やっと

私にも 訪れるような気がしていた

雨にはほんとは匂いがあるってことを

あなたは

知っているように思えて……。

ある日の真実

新妻 良江

「神の愚かさは 人の愚かさより賢い」

「神の弱さは 人の弱さより強い」

神は云われる

この世のものが 全て

神の意の中と云うのなら

弱さ故 もしくは掟の為に

全てを失った者が居るとしたら

その生きた証あかしは何？

残されたものは 一体何？

もし それを「平和」というならば

この世のすべて 人の為す全ての業

即ち「人は……

紛れもなく塵そのもの」

この世で大切なものは

何一つ目には見えず 手にも触れられぬと

幼い日から分っている私でさえも……同じ

そして 人は全てのものと

神とさえ 戦ってもまだ

失ってはいけないものが

本当は在るのだと

今は思う

人生の残り少ない この秋の日に……

この世には きつと
神様の在る^あずつと以前に
人の心があったのだと 今は信じている
その「心」を何と呼ぶにしても……
その「心」が神を見出し
人を形造り そして……
愛を見つけたのだと。

雨は 優しく軽やかに降り
今私は語る ことばは

「失ってはいけない」「諦めてはいけない」
「……すべし、という言葉で生きてはいけない」と

——たとえ愚かと云われても
人の知恵の方が賢いのだ——と
それを真実と呼べないのならば
人がこの世に生れた意味は 何？
そう 神に問いたい
生まれてこの方 カトリックと云う為に
罪を犯さなかった私が

人に 「掟」(破れない・守れない)を与えた
神という存在に対して……。

——その意味は？——
——報いはどこから来る？——
——「真実」とは？

永遠に答えのない問いを抱えて
私は今日も 雨の山で探している
楓の大木の幹に凭れながら

答えはきつと一番大きな罪は
自分自身に対して犯した罪だと……。
それに気付いたとき
神は 漸く
限らない憐みを以て
私を振り返るだろう……と

新妻 良江
プロフィール
主婦